



大学生の色々な恋愛が詰まった物語

『純愛』 VS 『欲望』 編

サークル名…裏森

作者 …うらもり

プロローグ	赤に染まる聖域
第一章	聖域を脅かす捕食者
第二章	愛し合うふたり
第三章	搾取の残滓、溺愛の泥濘
第四章	捕食者の放課後、不協和音の芽生え
第五章	銀世界の怠惰、無垢なる境界
第六章	背徳の聖域、忍び寄る墨滴
第七章	黒い取引、汚された聖域
第八章	泥濘の取引、蹂躪される聖域
第九章	不在の残響、震える信頼
第十章	摩滅する日常、静かなる洞察
第十一章	上書きの儀式、絶望の熱量
第十二章	捕食者の飽くなき渴望
第十三章	絶対の刻印、落ちる聖域
第十四章	捕食者の遊び
第十五章	侵食される日常、消えない恐怖
第十六章	隔離された純愛
第十七章	甘い毒、陥落の予兆
第十八章	束の間の救い、引き返すなら……
第十九章	抗えない快楽、響き渡る嬌声
第二十章	壊された幸せ、満腹の捕食者
第二十一章	背徳の巣、陥落の証明

《登場人物》

風沼良太 (かざぬま りょうた) 身長 175cm 体重 59kg

広瀬月乃 (ひろせ つきの) 身長 162cm 体重 46kg

桐生怜 (きりゆう れい) 身長 178cm 体重 64kg

:ファッションモデル (読者)

花村穂乃果 (はなむら ほのか) 身長 159cm 体重 43kg

中嶋奏多 (なかじま かなた) 身長 172cm 体重 57kg

片宮凜 (かたみや りん) 身長 165cm 体重 48kg

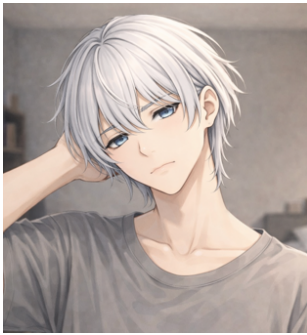
:ファッションモデル (専属)

瀬戸内梨央奈 (せとうち りおな) 身長 164cm 体重 50kg

柏木悠馬 (かしわぎ ゆうま) 身長 178cm 体重 65kg

斎藤海莉 (さいとう かいり) 身長 177cm 体重 61kg

※全員大学二年生・二十歳



風沼良太



広瀬月乃



桐生怜



花村穂乃果



中島奏多

片宮凜



柏木悠馬



瀬戸内梨央奈



斉藤海莉







プロローグ…朱に染まる聖域

世界は、あの日から色を変えた。

高く澄み渡った秋の空の下、僕たちは信じていたんだ。この平穏が、この清らかな絆が、永遠に続いていくのだと。奏多の誠実な愛も、凜の気高く美しい微笑みも、良太と月乃の間に流れる穏やかな時間も……。そのどれもが、何者にも侵されない「聖域」だと、疑うことすらなかった。

けれど、本当は知っていたはずなんだ。鮮やかに色づき始めた景色は、一度枯れ落ちてしまえば、二度と枝に戻ることはないのだと。

一通の通知。一瞬の油断。そして、暗闇から伸びてきた柏木優馬という名の「毒」が、彼女の純潔を、意志を、そしてその魂までも、音を立てて食い破っていた。

「最後の一回だけ」

その甘い毒を含んだ希望を頼りに、彼女は自ら奈落へと歩を進めた。絶望に震え、涙を流していたはずの彼女の瞳から、いつしか知性は消え失せ、代わりに宿ったのは……。自らを壊した男を狂おしく求める、虚ろで美しい陶酔の光。

「悠馬……もつと、めちやくちやにして……っ」

かつて最愛だった男の悲鳴が、冷たくなり始めた秋風にかき消されていく。彼女は泥濘の中で、あられもない声を上げてのけぞる。もう、誰も救えない。もう、あの穏やかな陽だまりには戻れない。

これは、美しすぎた僕たちが、秋の黄昏に呑み込まれ、快樂という名の底なし沼へ墜落していく記録。すべてを失

い、すべてを汚し、それでもなお、この背徳の熱に震え続けることを選んだ、僕たちの地獄の物語だ。

第一章…聖域を脅かす捕食者

午後の陽光が中庭をオレンジ色に染め、テラスのテーブルには三人の女子が囲む穏やかな時間が流れていた。月乃、穂乃果、凜。それぞれが手にした飲み物の氷がカランと音を立てるたび、彼女たちの纏う空気が微かに揺れる。

「……結局、今日の講義も課題が山積みだね」

穂乃果が、読みかけの文庫本を閉じて落ち着いた声を出した。その表情はどこか穏やかで、満たされた充足感を漂わせている。

「本当。せっかくの金曜日なのに、少しは手加減してほしいよ」

月乃が、その白銀の髪を揺らしながらストローを唇で挟む。

「……終わったら、何か甘いものでも買って帰ろうかな」

「いいな、二人とも。私はこれから正門で奏多と待ち合わせ。今日は映画に行く約束してるんだ」

凜がスマホの画面を見つめ、奏多の名前を口にする時だけ、その峻烈な瞳がふわりと柔らかくなった。

そんな彼女たちの「聖域」に、無遠慮な足音が近づいてくる。

「よお、お姫様たち。相変わらず、ここだけは別の空気が流れてるね。混ぜてよ」

悠馬が、金髪を弄りながら凜の背後の席に手をかけた。その隣には、退屈そうに周囲を値踏みする海莉が立っている。

二人は奏多と同じグループで、普段から行動を共にすることが多い。凜たちにとって、彼らは「全く知らない他人」ではなく、奏多の友人という断ち切りがたい繋がりを持つ存在だった。

「悠馬。……何の用？」

凜は振り返ることさえせず、冷ややかに応じた。声を荒らげることはない。ただ、明確に拒絶の意思を纏わせた、静かな声だった。

「用がなきゃ話しかけちゃいけないのかよ。奏多なら、さつきサークル棟の近くで見かけたぜ。あいつ、真面目すぎて面白みがないだろ……なんて言ったら凜に怒られるか。どうせなら奏多も誘って、この後みんなでパーッと行かない？」

悠馬はニヤつきながら、凜の機嫌を伺うように顔を覗き込む。

「……やめて。不快」

凜は小さく、だがつっぱりと言い捨てて、その手を避けるように身を引いた。

「私は奏多と二人で約束してる。あんたたちと遊ぶつもりはないよ」

「冷たいね、凜は。俺たちは奏多の親友だろ？」

悠馬の言葉を、凜は柳に風と受け流す。一方で海莉は、月乃の横顔をじっと見つめていた。その視線には、安易な言葉では踏み込めない何かを感じ取っているような、形容しがたい色が混じっている。

「月乃もさ、たまには別の刺激があった方がいいんじゃない？ いつも同じ場所で、同じ空気ばかりじゃ飽きるだろ」

「ありがとう、海莉。でも、私は今のままが一番心地いいから。……誘ってくれたのは嬉しいけど、遠慮しておくね」

月乃は困ったように眉を下げつつも、ニュートラルな微笑みで海莉を流した。その態度は完璧に丁寧で、だからこそ、海莉が入り込む隙間を一分も与えない。

「……ふふ。私たちはそろそろ行こうか。凜、奏多君を待たせちゃうよ」

穂乃果が、上品な動作で立ち上がった。彼女にとって、目の前の男たちは風景の一部でしかない。

「悠馬、海莉。……それじゃ、失礼するね」

完璧なあしらいに、悠馬は鼻で笑って肩をすくめた。

「……チッ。まあいいさ。今日は『お預け』つてことにしてやるよ。行こうぜ、海莉」

男たちが去っていく背中を見送り、凜は大きく息を吐き出した。

「……本当、なんなのあいつら」

「凜、大丈夫？ 災難だったね」

月乃が心配そうに声をかける。

「平気。あんな奴らのせいで、デートを台無しにしたくないし。……ごめん、二人とも。私は先に行くね。奏多、もう正門まで来てるみたいだから」

スマホの通知を見て、パツと顔を輝かせる凜。彼女は愛する人のもとへ、吸い寄せられるように駆け出していった。三人の女子が去り、中庭には再び静寂が戻る。

悠馬は遠ざかる凜の背中を眺めながら、ゆつくりと背もたれに身体を預けた。その表情には苛立ちよりも、どこか愉しげな色が浮かんでいる。

「……あーあ。相変わらず、完璧にシャットアウトされてるなあ」

悠馬は指先で唇をなぞり、独り言のように呟いた。

「あの凜の顔。奏多のことしか頭にないっていう、あの傲慢なまでの純粹さ……。あれをどうにかして、俺の顔だけしか見られないように変えてみたいよな」

「無理だよ、悠馬。あいつらには、そんな小手先の誘いは通用しない」

海莉は自販機で買ったブラックコーヒーの缶を開け、冷めた瞳で女子たちが消えた先を見つめている。

「見てなかったのか？ 凜の目。あいつ、奏多以外は男としてすら認識してない。普通にやって落ちるようなタマじゃないことくらい、お前もわかってるだろ」

「ああ、わかってるさ。だから面白いんだろ」

悠馬はフツと口角を上げ、ポケットの中で車の鍵を弄んだ。

「今はまだ、奏多との『幸せな日常』が永遠に続くと思ってるんだろうけど。……もしその奏多が、自分じゃどうにもできない泥沼に嵌まったら。あいつ、どんな顔をして俺を頼ってくるかな。その瞬間を想像するだけで、ゾクゾクするよ」

「……相変わらず、趣味が悪いね」

海莉は短くそう言ったが、その視線もまた、獲物を追い詰める方法を静かに吟味しているようだった。

「ま、精々じっくり考えなよ。……それより、今日は梨央奈のところに行くんだろ？ 待ちくたびれて、またスマホ鳴らしてくるんじゃないか」

「ああ。あいつは適当に転がしておけばいいからな。……さて、どうやってあの鉄壁に穴を開けてやるか。じっくり練ることにするよ」

悠馬は立ち上がり、余裕を感じさせる足取りで歩き出した。

凜たちが築いた「聖域」を、どこから、どうやって蹂躪してやるか。その残酷な期待を胸に秘めたまま、二人は西日の差すキャンパスを後にした。

第二章…愛し合うふたり

大学の正門前。待ち合わせ場所に立つ奏多の姿を見つけた瞬間、凜の表情からは先ほどまでの刺々しさが完全に消え失せていた。

「奏多！」

駆け寄る凜を、奏多は穏やかな微笑みで受け止める。

「お疲れ様、凜。……なんかあった？」

奏多が心配そうに覗き込むと、凜は首を振って彼の腕にしがみついた。そして、空いた方の手で彼の大きな手を指先から絡め、ぎゅっと握りしめる。

「……平気。ちよつと悠馬たちがしつこかっただけ。それより、早く行こう？ 映画、始まっちゃう」

凜は繋いだ手を自分の上着のポケットに引き入れ、誇らしげに、そして甘えるように密着した。

レイトショーの映画を楽しみ、夜風に吹かれながら歩く帰り道。二人の話題は尽きることがなかった。映画の感想、次の休みの予定、反映された日常の断片。

「……幸せだな、凜と一緒にいられるの」

不意に奏多が足を止めてそう言うのと、凜は少しだけ顔を赤らめて、彼の胸に頭を預けた。

「僕もだよ。凜がいてくれるから、僕は僕でいられるんだ」

二人の間には、他人が入り込む隙間など微塵も存在しなかった。

やがて二人は、奏多の一人暮らしのアパートへと辿り着く。

「ふう……。やつぱり、ここが一番落ち着く」

鍵を開け、室内の明かりをつけた奏多が、ソファに深く腰を下ろす。凜はその隣に、吸い寄せられるように座り込んだ。

「お茶、淹れてくるね」

立ち上がろうとする奏多の手を、凜がそつと引いた。

「……後でいい。今は、こうしてたい」

凜の瞳が、熱を帯びて潤っている。

奏多は何も言わず、彼女の細い肩を引き寄せた。

「凜……」

「奏多……っ」

重なり合う唇。

最初は、慈しむような、羽毛が触れ合うような優しい啄み。

けれど、一度互いの体温が混ざり合うと、それはすぐに飢えた獣のような深い口づけへと変貌していった。

「ん……っ、んむ……」

吸い付くような音を立てて、奏多の舌が凜の唇をなぞり、許しを請うように割り込んでいく。

凜もまた、待っていたと言わんばかりに自分の舌を絡ませた。

レロ、チュ……クチュツ、ズチュウウ……。

絡まり合う粘膜の音が、静かなりビングに不自然なほど生々しく響き渡る。奏多の手が、凜のブラウスのボタンを一つずつ、丁寧かつ、焦れたいほどゆつくりと外していった。

寝室へ移動し、シーツの上に横たわると、サイドテーブルの明かりが凜の陶器のような肌を照らし出した。

「凜……、すごく綺麗だ」

「奏多……、そんなに見ないで。恥ずかしい……」

頬を染めて顔を背ける凜だったが、奏多の愛撫が始まると、その声はすぐに甘い吐息へと変わった。

奏多の手は、凜の身体の「弱点」をすべて知り尽くしているかのように、正確に快感のツボを抉っていく。

耳たぶを甘噛みし、そこから首筋、鎖骨へと。

「あ……っ、奏多……っ、んんっ！」

奏多は凜の豊かな胸を両手で包み込み、丁寧に揉みしだいた。Fカップの柔らかな重みが奏多の手のひらから溢れ出す。奏多は片方の乳輪を親指で執拗に転がしながら、もう片方の先端を深く口に含んだ。

チュパッ、ジュルリ、ズチュウウ……。

「あ、あ……っ！そこ……、いい……っ、もつと強く吸って……っ！」

凜の背中が弓なりに反る。奏多は凜を気持ちよくすることに専念するように、もう一方の手を彼女の秘部へと滑らせた。

そこは、すでに奏多を求めて熱く濡れ、溢れ出た蜜がシートに小さな染みを作っていた。

「凜……、ここ、すごいことになってるよ。指、吸い込まれそうだ」

「だ、だって……っ、奏多が、そんな……エッチなこと言うから……っ」

クチュ、ズリユ、クチュルッ……！

奏多が指を動かすたび、粘膜が擦れ合う重い水音が響く。

奏多の指先が、彼女の最も過敏な場所を弾いた瞬間、凜の身体が大きく跳ねた。

「ひ、あああ……ッ！！奏多、奏多……っ、す……っ、そこおっ……！」

凜の鉄壁のガードは、奏多の指先一つで完全に崩れ去り、彼女はただ一人の男に奉仕される快楽に溺れていった。

「凜……、もう、いれてもいい？」

「……うん。奏多の、早く……っ、全部、私のなかに頂戴……っ」

奏多は凜の脚を大きく割り、その中心を自身の楔で貫いた。

ドチュツ、ヌチュリ……という重い肉の音が響き、二人の身体が一つに重なる。

「っ……！あ、あ……っ、奏多……っ、奥まで……あついよ……っ！」

まずは正常位。

奏多は凜の腰を支え、一步一步、確かめるように腰を叩きつけた。

ドスッ、ドスッ、と、肉と肉がぶつかり合う鈍い音が、静寂を支配する。

「あ、ん、はあっ、ん……っ、奏多あ……っ！」

行為の最中も、奏多は何度も凜の唇を奪い、互いの唾液を交換し合う。

「んむ……、愛してる、凜……っ」

「ん、ちゅ……っ、僕も……凜を、愛してる……っ」

ズチュ、ズリュツ、レロ……。

次は凜を四つん這いにさせ、背後から。バックの体勢。

奏多は凜の細い腰をガッチリと掴み、野性的に腰を振る。

「あ、あ……っ！ 奏多、そこ……っ、一番奥……当たってる……っ！！」

「凜、最高だ……っ、すっごく締まって……僕、壊れそうだ……っ」

激しい水音。ヌチュ、グチュル、ズチュウウ……。

凜の大きな胸が揺れるたび、肌と肌がぶつかる音が部屋を満たす。凜はシーツを真っ白になるまで握りしめ、襲い来る快楽に翻弄されていた。

堪らず奏多は、凜を自分の方へ向き直らせ、膝の上に跨がせた。

対面座位。

深く、一番奥まで繋がった状態で、二人は見つめ合う。

「奏多……っ、私の顔、見て……っ」

「見てるよ、凜。……全部、僕のものだ」

奏多は凜の胸を掴み上げ、下から突き上げるように腰を動かす。結合部が擦れ、泡立つようなグチュグチュという音

が響く。

「ん、あ、奏多……っ、キスして……っ」

促されるまま、奏多は凜と深く、深く舌を絡ませた。

レロ、チュ、んむ……っ、ズチュウ……。

結合部からの脳を揺さぶる刺激と、口内の熱さが混ざり合い、二人の意識は一つに溶けていく。いよいよ限界が近づき、奏多は再び凜を仰向けに倒した。

フィニッシュは、お互いの鼓動が最も近くで感じられる正常位。

奏多は凜の脚を自分の肩に担ぎ上げ、最も深い場所を抉り抜くように、猛烈な追い込みに入った。

「でる……っ、凜……っ、中、だすよ……っ！」

「だして……っ、私のなかに……っ、奏多の全部、ちょうだいっ！！」

「ん、んむうっ……！！」

最後の瞬間まで二人は唇を離さず、喉の奥を鳴らすような深い口づけを交わした。

グチュ、グチュル、グチュウウ……ッ！！

激しい水音とともに、奏多の熱い情熱が凜の深淵へと一気に解き放たれる。

「あ……、はあ……っ、奏多……っ」

凜は奏多を強く抱きしめ、自分を満たす彼の熱を全身で感じながら、至福の絶頂へと堕ちていった。しばらくの間、二人は重なったまま、荒い呼吸を整えていた。

静まり返った部屋に、愛の匂いと、二人の吐息だけが残る。

「……凜。愛してる」

「……うん。僕も、凜だけを、愛してる」

奏多は凜の額に優しくキスを落とし、彼女を抱き寄せたままシーツに身を沈めた。凜は奏多の胸に耳を当て、まだ少

し早い彼の鼓動を子守唄代わりに聞きながら、ふと思い出したように口を開いた。

「……ねえ、奏多。さっき正門で悠馬たちに会ったって言ったでしょ」

「うん。何か言われたの？」

奏多が穏やかな声で聞き返すと、凜は少しだけ眉を寄せて彼の胸を指先でなぞった。

「ううん。いつものように、どこか行こうってしつこかっただけ。……私、あの人たちの馴れ馴れしいところ、やつぱり苦手」

奏多は困ったように眉を下げ、凜の柔らかな髪を優しく撫でた。

「あはは、また誘われたんだね。もう、しょうがないなあ、二人は」

奏多の口調には、怒りや嫉妬の色は微塵もなかった。ただ、仲の良い友人の悪戯を許すような、おっとりとした響きがあった。

「悠馬も海莉も、ちょっと強引なところはあるけど、悪い奴らじゃないんだよ。きつと僕が凜を独り占めしてるのが羨ましいだけだと思うな。……凜が困るなら、僕からも今度軽く言っておくよ」

「……奏多は人が良すぎるんだよ。あの人たちが何を考えてるか分かったもんじゃないのに」

凜は奏多の腕にぎゅっと力を込めた。彼女は本能的に、あの二人の瞳の奥に宿る「濁り」を感じ取っていたが、奏多のこの底抜けの優しさと信頼を壊したくないとも思っていた。

「僕には凜がいるから大丈夫だよ。……ねえ、凜？ 明日の朝は、ゆつくりパンでも焼こうか。……それとも、まだ眠くない？」

「……奏多のせいだよ。私、もう動けないくらい、奏多に全部抜かれちゃったんだから」

凜が甘えるように囁くと、奏多は「参ったな」と照れくさそうに笑い、彼女をさらに強く抱きしめた。

窓の外では、悠馬たちの企みが蠢いているかもしれない。

けれど、この部屋の中だけは、何者にも侵されることのない、たった一つの純潔な聖域だった。